

## 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 功労賞

- <氏 名> 勝田 茂 (かつた しげる)
- <所 属 等> 筑波大学 名誉教授
- <学 歴> 1959年 東京教育大学体育学部健康学科 卒業
- <学 位> 1974年 医学博士 (九州大学)
- <職 歴> 1962年 東京教育大学 助手  
1968年 九州大学 助教授  
1974年 ワシントン州立大学 客員准教授  
1979年 筑波大学 助教授  
1986年 筑波大学 教授  
1988年 筑波大学体育専門学群 副学群長  
1996年 筑波大学 体育科学系長  
1999年 筑波大学 体育専門学群長  
2000年 筑波大学 名誉教授  
2000年 東亜大学大学院 教授  
2006年 東亜大学大学院 客員教授  
2015年 東亜大学大学院 客員教授 退職
- <受 賞> 1990年 日本バイオメカニクス学会奨励賞  
1991年 第1回日本体力医学会賞  
1992年 第1回日本体育学会賞  
1993年 日本テニス研究会奨励賞  
2001年 第13回中富健康科学振興賞  
2003年 健康・体力づくり事業財団表彰  
2006年 日本体育協会スポーツ指導者表彰

## <功 績>

勝田茂氏は運動生理学、特に筋肉生理学を専門として、永年にわたり研究活動に携わり、日本のスポーツ医科学の発展に貢献する研究活動を展開してきた。その中でも、骨格筋線維の成長や変化に関する研究では数多くの研究論文を発表した。また、生理学の視点から、加齢と健康に関する研究にも力を入れ、人の生涯にわたる健康・体力問題について多角的な研究を行った。

1970年代、筋バイオプシー法（筋生検法）の普及により、臨床応用だけでなく、骨格筋の筋線維組成（速筋線維と遅筋線維）に関する研究が進歩した。折しも日本では、1964年の第18回オリンピック競技大会（東京）を契機にスポーツ医・科学研究がひと際盛んになり始めた時代であった。同氏はいち早く、この先進の研究手法に取り組み、日本における骨格筋研究の先駆的業績をあげ、この研究分野の礎を築いた。

筋バイオプシー法は、実際に対象者の筋線維を採取し、筋中でどのような活動が起こっているか直接的なデータを取ることができた。これらのデータは一般の健康的な人への研究から、アスリートへの応用的研究まで、幅広い分野で活用された。とりわけ、スポーツ医科学分野としては、筋線維組成とスポーツのパフォーマンスについての研究を進め、筋線維組成はスポーツの適性を体力面から検討するうえで、重要な要素の一つとなることが分かった。実際に一流選手といわれる選手の筋線維組成を採取し、陸上競技選手には陸上競技選手の、競泳選手には競泳選手それぞれの筋線維に特徴があることを研究論文にて発表した。

また、同氏はこれらの筋線維組成に関する研究を、発達や加齢に伴う健康・体力問題への解決に向けて取り組み、加齢に伴う筋の老化現象やそのメカニズムを明らかにするための研究を行った。その結果、加齢に伴い筋線維が減少したこと、また年代によって減少率に変化が生じること等を究明し、中年期において、筋への十分な活動刺激を与えることが必要であるということを発表した。その一方で筋線維が減少する高齢者においても、高パフォーマンスが発揮できるかといった疑問についても研究を行った。

上述した通り、加齢に伴い筋線維は減少し、身体の各器官は機能低下が生じるため、高齢者はトレーニング効果が得られにくいだけでなく、けがをしやすと考えられていた。しかしながら、ある一定の高齢者は高強度のトレーニングに適応し、筋力・持久力の改善・増加が可能であるということが、先の研究で解明されていた。そこで2000年頃、同氏は国内・国外のマスターズ大会に出場する80歳以上の男性高齢アスリートを対象に、身体活動能力を規定する要因である、骨格筋能力と呼吸循環器系能力を中心とした測定を行った。また、あわせて当時は大変珍しい研究として、70歳以上の女性の優秀なアスリートを対象に同様の調査を行った。調査の結果から、高齢アスリートにおいても筋萎縮は認められるものの、一般の高齢者よりも抑制されていること、加齢に伴うVo<sub>2</sub>maxの低下が抑制されていること、高齢アスリートは総じて高い骨密度を有していることなどが解明された。これらの研究結果から、同氏は現在の超高齢化社会についても触れ、「高齢者にこそ筋トレを」と提唱し、高齢者にとってスポーツは健康づくり・体力向上だけでなく、肉体的にも精神的にも健全な生活を送ることができ、QOLの向上に寄与するであろうということ述べている。

同氏の研究フィールドは、実験室での基礎的研究から、スポーツ現場での実践的研究まで、実に多彩である。競技団体の医・科学サポート事業に携わった他、日本体育協会（現日本スポーツ協会）のスポーツ医・科学専門委員会委員を長年にわたって務め、多くのプロジェクト研究に参画した。とりわけ「スポーツタレント発掘方法に関する研究（1989～1991）」、「ジュニア期の体力トレーニングに関する研究（1991～1994,1998）」では、ジュニア競技者のタレント発掘やトレーニングといった、スポー

ツ現場での実践に対し運動生理学の立場からスポットを当て、その活用や課題について提言した。ジュニア競技者を対象に、高度な研究手法を用いて総合的に検証した研究は、当時において世界にも類例がなく、時代を先取りした画期的な研究であった。

同氏の研究内容は、現在のスポーツ医科学分野において中核的な領域であり、その分野の礎を築いた。また、これら一連の卓越した研究業績を残していると同時に、優れた教育者でもあった。「勝田研究室」が輩出した若手研究者たちは、次々と優れた研究成果を発表し、国内外を問わず、現在各研究機関において第一線で活躍しており、外国を含む国公私立大学での教授は 50 名を超えており、後進の教育にも大いに力を注いだ。

同氏は以上の輝かしい研究実績を積んだ研究者であると同時に、自身もアスリートである。80 歳を超えた今なお、テニスプレーヤーとして第一線で活躍している。テニスは 30 歳を超えてから始めたものであり、当初は試合に出る度に負け続けた。しかしながら、その後も練習を継続し、地域の試合への出場を続けたところ、気が付けば全日本選手権大会において 2 回も優勝する実力者に成長した。また、70 歳で初めて国別対抗の世界選手権大会に日本代表として出場以来、現在まで 7 回を数えているなど、トップアスリートとして活躍しており、現在もテニスは継続中である。同氏の研究実績の集積と、自らのスポーツライフはこれからの高齢者とスポーツへ向けた力強いエビデンスとなっている。

同氏は、高齢者スポーツについて次のように述べている。

「誰もが一流選手になれるわけではなく、その必要もない。目標に向かって努力し、仲間とプレーする。何事にも前向きになれ、そして何かに生きがいを見いだせる。それが、健康・体力作りにも役立ち、健康寿命の延長にも貢献できるだろう。何歳から始めても遅すぎることはない。Never too late.」

以上のことから、日本のスポーツ医科学の発展に多大に貢献した勝田氏を本賞受賞者として推薦する。